

一面に田畑が広がる福島県北部の伊達市霊山地区。のどかな農村地帯にデジタル表示のパネルが付いた機械が点在する。役場の前に、集会所の脇に、小学校の校庭に…。放射線量を測定する「モニタリングポスト」だ。南東約60キロに東京電力福島第1原発がある。放射線量が局所的に高い「特定避難勧奨地点」(117地点、128世帯)の

人口減社会をひらく



## 終章 パラダイムシフト

# 戦後から「震災火後」へ

指定は解除されたものの、東日本大震災から3年たっても住民の不安はぬぐえない。シイタケやユズなど農作物の出荷停止も続く。

事故直後、ふるさとの霊山地区から倉敷市児島に移住した映像クリエーターの大橋敦さん(34)が振り返る。

「もう、何でも人任せ、行政任せにするのはやめました。まずは自分の目と耳で確かめて行動する。脱サラして移住したのも、新天地で起業したのもその思いからだった」

大震災を契機に被災地や首都圏から岡山県へ避難、移住して

「3・11」を境に、人々の暮らしは一変した。上から時計回りに、福島県伊達市霊山地区、放射線量を測るモニタリングポスト、霊山地区でシイタケ作りを続ける農家のコラージュ

くる人が増えている。復興庁のまとめでは千人を超える。放射線の影響を懸念する30代の子育

### ① 「豊かさ」の定義

て世代が中心で、夫を残して母子だけという場合も多い。その底流には安全・安心を求めただけではなく、経済成長を追求し続けた戦後から「震災後」へのパラダイムシフト(思考の枠組みの転換)があると、日本大教授(都市社会学)の後藤範章さん(57)は話す。

「若者たちに顕著なのは食と農、自然との関係を見直すライフスタイル。もう一つはお互いに支え合うコミュニティの構築で、これらは従来

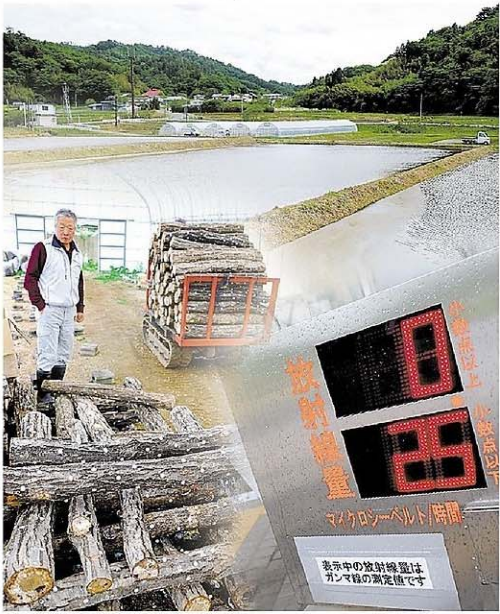
脱サラしてコメの自然栽培を始めたデザイナー、天然の原材料にこだわるパン職人、地元イベントを手伝う音楽家…。移住者の中にはそれぞれの技能を生かし、地域の新たな担い手として活躍してい

る人がいる。大橋さんは起業以来、児島地区など県内企業15社のCMやホームページ用の動画を制作した。「僕を受け入れてくれた児島は第二の故郷。シーズンで知られるこの地をより立てる一員になりたい」

県内では震災の5日後に避難者を支援する住民組織「おいでんせえ岡山」が発足し、これまでに600人の被災者を支援し、380人の避難・移住を手伝った。これを起点に避難者自らも支援組織や交流グループを次々に立ち上げ情報を発信している。受け入れ環境が整えられてきたことも避難者・移住者が増えている要因だ。

「震災をきっかけに地域社会との接点を見つけ、人のために行動する。それが自分のためにもなると体験を通して知ることが成熟した市民社会への第一歩となる。岡山は「いま、地殻変動のただ中にある」と後藤さんはみる。

東日本大震災は、戦後の成長神話の破綻を示した。連載のエピローグは、避難者たちを通して人口減社会と向き合う地方の可能性を探る。



「意見、感想、体験談をお寄せください。〒700-8003 4、山陽新聞帰りなん、こた」取材班。ファクス0866-8003-81110、メールkaerinan@sanyo.onicon.jp

人口減社会をひらく



家族と離れ離れになった心細さや悲しさ、生活基盤を失った不安や焦り、慣れない土地での孤立感……。厳しい状況にある東日本大震災の避難者を支援する民間団体が岡山県内で活動の場を広げている。

瀬戸内市を拠点に活動する交流グループ「つむぐる」は東北や関東地方から移住した母親5人が立ち上げた。発足して1年半。メンバーは岡山県内に住む約100人で、避難者と地元住民が半々。お互いの親睦を図るため、映画の上映会や料理教室などのイベントを開いている。会の名前には、人と人の縁を糸のように紡いで、周りをぐるぐる巻き込んでいくことの思いを込めた。

発起人の一人で、埼玉県から自主避難した蝦名宇摩さん(37)が話す。「『支える』『支えられる』という立場を超えて、地域社会の中に豊かな時間と空間を生み出したい」。自身は津軽三味線奏者。音楽活動を通して地域

終章 パラダイムシフト

新たな絆で幸せ探す

に溶け込むことができた経験がスタートラインになった。

難・移住者には、母子だけのケースが多い。震災直後の2011年4月、祖父を頼って岡山県に移住した蝦名さん

放射線被ばくを恐れての避

んも埼玉県に夫を残して小学



つむぐるのイベントではしゃぐ子どもたち。その姿は地方が持つ可能性を感じさせる＝5月4日、岡山市東区宝伝・宝伝海水浴場

3年と5歳の娘と暮らしている。安心して子育てをしたいとの思いは母親に共通したものだ。

放射線から子どもを守る。今できることをする。行動原理は明快でパワーがすごい。それは避難先の既存のコミュニティにとっても大きな力になるはず」。避難してきた母子家族の生活実態を調査している岡山理科大非常勤講師の緒方清隆さん(69)は言う。

「埼玉では私は『奥さん』だった。でも、ここでは2人の子どもを育てる『大黒柱』。自分の生きる力を見直すきっかけになった」という蝦名さんは今、町内会(350世帯)の班長を務めている。

「つむぐる」のメンバーの一人、松尾文章さん(38)は今年2月、就農を目指して東京から瀬戸内市に移住した。映画撮影の

元照明スタッフ。その技術を生かし、映画制作・上映グループ「シネマニワ」に加わった。主宰者は、真庭市を拠点に農業の合間に自主映画を撮り続けている山崎樹一郎さん(35)だ。東京時代の仕事仲間がグループにいたのが縁だった。

「お金がないならみんなで協力して何とかしようという姿勢が新鮮だった。全てが商業ベースの都会ではあり得ないことが、ここにはある」と松尾さんは言う。

つながりが、新しいつながりを生んでいく。

避難者の動向を追っている日本大教授(都市社会学)の後藤範章さん(57)が指摘する。

「脱都会を目指した人には覚悟がある。一極集中に象徴される経済最優先、効率第一の価値観とは距離を置いて、新たな絆を構築していく中で自分なりの幸せを探そうとしている。地方回帰の根底にそれがある」

終章おわり。秋山昌三が担当しました。次回は最終回「連載を終えて」を掲載します。

⑤ つむぐる

「ご意見、ご感想、体験談をお寄せください」。〒700-8166、山陽新聞「帰りなさん」取材班。ファクス0869-8080-8080、E-mail: kaerinan@sanyo.onico.jp